江戸群盗伝

柴田錬三郎

江戸群盗伝

定価はカバーに表示してあります。

新潮文庫 草150C

昭和三十五年一月十日 発行
昭和四十八年四月三十日 十九刷

著者 柴田錬三郎

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社
郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京(〇三)(二六〇)一一一一
振替東京八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

㊫ 印刷・塚田印刷株式会社 製本・憲専堂製本所
© Renzaburô Shibata 1960 Printed in Japan

新潮文庫

江戸群盗伝

柴田錬三郎著

新潮社版

1357

江戸群盗伝

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

川の月

静かな深夜であった。十六夜の月は、暈をかぶって、おぼろであった。

三十間堀をのぼる猪牙船の、櫓のきしりと、水をきる音だけが、単調に、この深夜の静けさをみだしていた。

梅津長門は、船から三間あまりはなれた水面で、砕けてはまた円をとりもどす月影を、茫然とながめて、舷へよりかかっていた。宗十郎頭巾をかぶり、黒羽二重の着流しであった。

吉原での流連七日の疲労が、梅津の四肢にしみわたっていた。酔いのさめはてた後のうらわびしいむなしさに、胸の中は乾いていた。

しかしわかれてきた江戸町二丁目の大阪屋の女郎花鳥の匂いが、まだ濃く、長門の鼻孔にとどまっていた。

長門には、その匂いが、はげしい毒素を含んでいるように思われた。

――たしかに、毒婦だ、あいつは。蛇身……というが、それだ。

空虚な脳裏の片隅に、そんな呟きがあった。その蛇身にうつつをぬかしているおのれが、なんともいえぬやりきれなさでさげすまれる。

「旦那。どこへ着けます？」
船頭が、きいた。
「うん――」
生返辞をする長門の暗い眼眸は、大きくふたつに割れて散る月影へ注いだまま、
　むらぎもの心もそらにうかぶかな　月のうえこぐ棚なし小舟
そんな歌が、ふっと思い泛んでいた。
十年前、梅津長門は、旗本の軽輩の中では、文武ともに群を抜いた秀才であった。
「新橋際へ着けますか。……信楽茶屋で口直しをなすっちゃいかがです？」
「もうこの時刻じゃ、寝てしまったろう」
長門は、そう云って、はじめて彼方の河岸を振りかえった。明りは消えて、どの家も、くろぐろとひそまっていた。
「なアに、たたき起こしまさア」
「いや、いい、そこの土堤へあげてくれ」
「銀座にお泊りになるところがござんすので？」
長門があがるといった場所は、草の露が光っている淋しい野原であった。
銀座――といっても、天保年間のことである。船宿を除けば、遊人を泊めるような家は一軒もなかった。船頭が、不審に思ったのも当然である。尤も、乗り際に長門の無造作に呉れた二分銀が、船頭に心をつかわせていたのである。

「これから辻斬をやるのだ」
長門は、ぼそりと云った。
「ご冗談を――」
船頭は、笑った。
しかし、長門は、べつに思ってもいなかったその冗談を口にしたとたん、ふっと全身の神経が動くのをおぼえた。
――そうだ、ひとつやるか！
すでに、二度ばかり、その経験のある長門であった。船頭にくれてやった二分で、彼は完全に無一文になっていた。

美少年

河岸（かし）をそれて、ほどなく、ひくい軒並の町中をゆっくりとたどる梅津長門には、いつか鯉口をきる心の準備ができていた。また、跫音を消して歩く訓練のできた男であった。
――来たな？
よほど遠くから近づいてくる人の気配も、彼のひきしまった神経にすぐつたわっていた。
長門は、とある路地へ、すっと身をひそめた。
距離が、かなりせまってから、長門は、そっと顔だけのぞけて、前方をすかし見た。

――なんだ、丁稚か。

あきないを終えての戻りであろう、それは天秤棒で御膳籠をかついで急ぐ前髪をつけた少年であった。

長門は、がっかりして、路地から出ようとした。

その時、丁稚の背後から、黒い影が、非常なすばやさで跳びかかるのを、長門は見た。

丁稚が声もあげずに横倒しになったのは襲撃者の手練といってよかった。

天秤棒が飛んで、銅張りの天水桶にぶっつかるひびきだけが、大きく夜空にひろがった。

襲撃者は、木場へんの川並の職人といった、大紋付の半纏に盲目縞の股引腹掛、三尺帯に豆しぼりをはさんだ風態であった。

――丁稚を襲うとは、よほどしけた野郎だな。

苦笑しつつも、長門は、それにしてもその強盗の手際のあざやかさを訝りつつ、じっと見まもっていた。

すばやく丁稚の衣類を剝取り、半纏を脱ぎすててきかえ、帯をしめおわると、そのあたりにちらばった小銭をひろいあつめる落着きぶりも、小憎らしかった。

のみならず、御膳籠の中から、縄で括った備前徳利を四五本ぬき出して、片手に携げ、すたすたとあるき出した。

「おい！」

路地の前を過ぎようとしたその男にむかって、長門は、思わず、鋭い声をかけた。

ぱっと向き直った身構えの隙のなさに、長門の不審は、さらにふかまった。しかも、意外であったのは、月光をあびたその顔が、まだ少年のものだったことである。ほれぼれするような美しいつくりではないか。

「貴様、それだけの腕をそなえ乍ら、なぜ丁稚ふぜいの着物を剝ぐのだ？」

返辞はなかった。

長門が、放火盗賊検めの加役と称する役人ではなかったのが、相手を、ほっとさせた様子であったが、抜打ちを警戒する身構えだけは一分も崩さなかった。

「返答しろ！」

長門が、一歩出ると、少年は一歩さがった。

一瞬、長門の長身に殺気が走った。

「待った！」

と、少年は手をあげた。

「旦那。……じつは、おいらは、川にはまって、ずぶ濡れだったんで――」

「着がえにかえる家がないむく鳥だというのか？」

「へい」

「なぜ、川にはまった？」

「なぜって――そりゃ……」

「酔って足をすべらせる年ではないらしいぞ。貴様まだ二十歳前だな？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「へい。十八なんで――」
とこたえて、不敵に、白い歯をみせた。
「云え！　なぜ、川にはまった？」
「旦那！」
少年は、急に語調を鋭くかえた。月光の中ででも、その表情が、一瞬毎によくうごくのがわかった。それによって、目から鼻へ抜ける俊敏な性格であることがうかがわれた。
「云いにくいことを、阿漕にきかねえでもらいてえ」
「よかろう。きくまい」
長門は、あっさり折れた。
「そのかわり、小僧、どうだ、おれにつきあうか？」

わかれ唄

「旦那――」
庄吉と名のったその少年は、長門と肩をならべてあるき出し乍ら、云った。
「旦那は、できますね」
「おれができるのがわかる貴様の方こそ、その目ききをどこで修業した？」
「ふゝゝゝゝ……」

庄吉は、ふくみ笑いをもらして、こたえなかった。
長門は、さっきから気づいていたのを、もう一度たしかめるために、庄吉の頸へ、ちらっと一瞥をくれた。
その頸に、一筋すり傷の痕がついていた。長い間、捕縛されていた証拠である。
いつか、二人は、木挽町の市菴をぬけて、武家屋敷の白壁塀に沿うてあるいていた。風が出てきたか、塀の上にのびた樹枝が、かすかにざわめき、地に這わせた影をゆれさせていた。
「おい、庄吉。貴様、まさか、鉄砲洲のむこうから泳いで来たんじゃあるまいな？」
長門は、なにげない口調で尋ねた。
鉄砲洲のむこうは佃島である。囚人の苦役の場所である。
「旦那、きかねえ約束でしたぜ」
「知ってかばってやるのと、知らずにかばってやるのとは、こっちの了簡がおのずからちがってくるというものだろう。……いいか、むこうから来たのは、加役だぞ」
長門は、すでに、はるか彼方からやってくる跫音を、小吏独特のあるきかた、と察していたのである。
「いけねえ！」
庄吉は、小声で、云った。
「旦那、図星でさ。おいらは、島を破って来たんです。たすけておくんなせえ」
「うしろへさがっておれ」

やがて――、

二人の前へあゆみ寄ったのは、加役庭場重左衛門であった。加役は、およそ十月に就職し、翌年三月に解職する規則である。庭場は、今夜が、その最後の日であった。

庭場が、立ちどまると、長門と庄吉も足をとどめた。

「この夜ふけに、どちらへ行かれる？」

「帰宅の途中です。小普請組、梅津長門」

「お住宅は？」

「すぐそこです」

と、ぼかしてから、

「女房が嫁に来た折、こっそり鏡の裏にかくしておった小判六枚を、ひょんなことで発見いたしてな、とんだ山内一豊の女房――。江戸町の格子女郎相手に七日流連、とうとう足を出して、こうしてつけ馬をひきつれて帰るところです。ははは」

「左様ですか、……では、どうぞ、お気をつけられて――」

すれちがって、数歩行かぬうちに、長門は、ひくく唄いはじめた。

忍ぶ恋路は、さてはかなさよ
今度逢うのが命がけ
よごす涙のおしろいも
その顔かくす無理な酒

しぶい、いい声の本調子であった。

無頼の宿

木挽町の海辺ちかく、中津藩邸の裏側に、たった一軒だけ、とりのこされたような居酒屋が建っていた。

このあたりは大小名の藩邸地帯で、あちらこちらの中間部屋では、夜毎賭場が開帳されていたが、それに集まる連中を、この居酒屋は、客としていた。いわば、世間から掃き出された、いずれどいつもこいつも、心身に傷を負った悪党たちの、吹き溜りで、ここはあった。

路地を吹きぬける風がやや強くなり「つや」と紺に白く染めぬいた暖簾を、あおって、ぴったりととじられた表戸をかすかにたたいていた。

夜が更けるにしたがって、寂寞は、いっそ、じいんと底鳴りするまでに冴えていた。それというのも、三坪ほどの店の中には、ずうっと長い間、ふかい沈黙が占めていたからである。

客がいなかったわけではない。

奥のはめ板に凭りかかった二十七八歳の男が、思い出したように猪口を口にはこんでいた。博徒と一瞥でわかる刷毛先を曲げたはずかけ本多、着崩した唐桟留、焦茶博多に落した長脇差は、鍔・目貫に金の象眼をほどこして、たぷん中身もわざものに相違ない。

猪口をはこぶたびに、袖口から朱桜の文身がのぞいた。

苦味走った面貌にただよう虚無的な冷たさが、この男の生きている世界の血なまぐささを暗示していた。

縄のれんのむこう側では、熱く燃えた炭火にこごみかかったかみさんが、色褪せた肩掛へ顎をうずめて、俯向いていた。

平和なねむりをむさぼる大江戸の寒夜と、まったく無関係にきりはなされた寂寥の底に思い沈んで、じいっとこの一瞬の孤独に堪えている二人の姿は、このままいつまでもつづくかと思われた。

と、隙間風で、かすかにゆれていた行燈の明りが、二三度すうっと仄暗くまたたいた。客は、それへなんとなく視線をなげて、ぶるっと胴顫いした。それから、やっと、このふかい沈黙をやぶった。

「うう、寒くなってきやがった。かみさん、熱いやつを一本つけてくれ」

その声で、おかみさんは、多分二年前に行方不明になった娘のことでもじっと想い耽っていたのであろう。茫然とした遠い眸子を、ほっとわれにかえったようにあげていた。

「なんだか、今夜は、底冷えするようでござんすねえ」

「それに……妙に、客のねえ晩だな」

「月に一二度、こういう淋しい晩があるんでござんすよ」

「こんな夜……店で一人寝るのはやりきれなかろう。かみさん、亭主はねえのか？」

「娘をつれてお伊勢詣りに出かけてそれっきり……箱根の山で、強盗に遭って殺されたんじゃな

いかと思います。床に入って、寝そびれると、生きているのがつくづくイヤになりますよ」
男は、かみさんへ、ちらっと視線を走らせて、すぐそらした。不吉な話は、この男の心の傷口にふれた様子であった。
梅津長門が、庄吉をつれて、この店へ入って来たのは、その時であった。
長門には、この店は数年来の馴染であった。

仇討

「庄吉と言ったな」
長門は、庄吉の猪口へ酒をついでやり乍ら、あらためて訊いた。
「へい」
「ふたつ名は、なんだ？」
庄吉は、隅の博徒の存在をはばかる目つきになると、返辞をする代りに酒をぱっと口へなげこんだ。
「あるだろう。……心配するな。ここはなにをしゃべっても、戸口から外へ洩れる気づかいのない処だ。そうだろう、客人？」
と、長門は、博徒をかえり見て笑った。
「へい、左様で――」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com